

演劇集団 広小路

まず、戯曲そのものに惹きつけられました。

老人ホームの人々が新しい入居者を迎え、騒動を乗り越え新しい共同体が生まれるという大きな筋立ては老人ホームを舞台にした戯曲の王道とも言えますが、焦点を老人だけに絞らず、多角的にホームの様子を描いた点に工夫を感じました。

その中でも、「ロボット介護者」が非常に魅力的な登場人物でした。人ではない存在を一つの軸として差し込むことで、対照的に人の営みが見えやすくなります。例えば、入居者がロボットの手の冷たさを怖がり人の温もりを求める場面や、ロボットと比較されつつよく似た仕事内容をすることに生きがいを見失う若手介護者の姿は、入居者や若手介護者それぞれの葛藤を提示すると共に、「人とは何か」という普遍的な問いを観客に投げかけているように感じました。

その問いが、老人たちの悲しい戦争の記憶を媒介に、ホームの前を通る平和行進の場面へと移行していく展開も秀逸でした。「人らしく生きたい」という人々の切なる願いが、身近なモチーフを通して過去、現代、未来と絡み合うように描かれていく劇構成に説得力がありました。

演技では、認知症の老人の俯き加減具合や、「パンは嫌や」という時の老人の腕の動きなど、細かな体の使い方の中に、まるで自分自身の祖父母を見ているかのような真実味を感じ、素晴らしく思いました。

ただ、若手介護者の演技はもう少し工夫ができるように思いました。台詞の内容からは20代程度の印象を受けるのですが、あまり演技には若々しさを感じませんでした。話し方で工夫されている様子はわかりましたが、他にも例えば笑顔を大きくしたり大きく動いたりという、所謂典型的な「若さ」を動きで表現することで、よりわかりやすくなると思います。

演出では、劇後半、皆で舞台に散らばる紙風船で遊ぶ箇所の叙情性が素晴らしいと感じました。耳馴染みの良いわらべうたに郷愁を誘われ、舞台上の人物を身近に感じ、提起されている問題を自分のこととして受け止める誘い水として機能していました。

戯曲の構成の仕方、演技における真実味、演出の叙情性など、工夫と魅力に溢れた公演でした。今回の公演には、前回の舞台を観劇して、面白そうだと参加した方もいらっしやうとアフタートークで伺いましたが、そのように輪が広がって行くこと自体が素晴らしいと思います。今後の舞台も楽しみにしております。

(担当：岡田 蒨子 大阪大学大学院演劇学研究室)